

2107 離島覚書（長崎県・久賀島）



奈留島の小田河原展望台がから久賀島を望む

令和3年6月24日

馬蹄形の島

久賀島は五島列島最大の島である福江島の北東に位置し、最も近いところでは数kmしか離れていない二次離島である。福江港から「高速船シーガル」が久賀島の田ノ浦漁港（第1種）を結び日に3便就航している。また福江島の奥浦港と田ノ浦漁港を結び「フェリーひさか」がやはり日に3便運航されている。

久賀島は面積 37.23 km²、周囲 62.8 kmの馬蹄形をした島で、中央部に久賀湾という深い入り江が切り込んでいる。五島列島の中では、福江島、中通島に次いで3番目に大きな島だ。とても徒歩では回れる島ではないので車が必要であった。訪問前の情報では久賀島にレンタカーはないと思っていたので、福江島のトヨタレンタカーで軽自動車を借りてフェリーで渡る計画をたてた（島に入ってわかったのだが、久賀島にもレンタカーがあったので、フェリー代金とレンタカー代金の一部が無駄になった）。

椏島から戻り、フェリーの出発時刻まで奥浦の堂崎教会の資料館、金子産業のマグロ養殖事業所、五島ふくえ漁協深浦支所の直売所に寄る。ただ直売所は新型コロナの影響で休業中、中をのぞくとカキ焼きの施設があったからこの地区でもカキ養殖が始まっているようだ。深浦港発 16時50分のフェリーに乗った。

田ノ浦に着くと事前に連絡しておいたチャーター船・長久丸が待機していた。すぐに蕨小島に向う。蕨小島へは定期船が運航されていないため島に渡るには船をチャーターする以外にないからだ。ところがチャーター船は20～30人は乗れそうな大型のものであった。現金の持ち合わせが少なかったので、ひょっとしてお金が足りなくなるのではないかとひやひやしながら蕨小島に向かう。蕨小島に上陸し、10分ほど取材して、すぐに田ノ浦漁港（第1種）に引き返した。蕨小島からは約30分を要し、18時20分ごろに久賀島に上陸した。すぐに道路脇に停めておいたレンタカーに乗り、今晚の宿である民宿深浦荘へと急ぐ。

久賀島は南松浦郡久賀島村として1島1村であったが、1957年に福江市に編入され、さ

らに2004年に1市5町の合併で、現在は五島市となっている。

2015年国勢調査時の人口は294人、世帯数は184戸だった。人口密度は7.9人/km²と極端に低い。高齢化率は54.6%であったが、現在はさらに割合が高くなっているものと推定される。4月30日時点での住民基本台帳上の人口は301人、世帯数は188戸であった。しかし実際に住んでいる人は基本台帳上の人口よりもかなり少ないと言われている。1874（明治7）年に久賀島で初めて戸籍ができた時の人口は2,009人、世帯数は411戸であった。1917（大正6）年には3,483人、519戸に増加する。島の人口のピークは1950年でこの当時の人口は3,968人、世帯数は719戸であった。したがってピーク時と比較すると人口は1/10以下、世帯数は1/3ほどに減っていることになる。

久賀島の集落形成の特徴は、特定の集落に人が集中することなく、小さな集落が島全体に分散している点にある。これは半農半漁の生業が中心で、一次産業以外の産業があまり発達しなかったことによるものだろう。また後述するように1797（寛政9）年に五島藩と大村藩との間で百姓移住の協定が成立して以降、大村藩からの開拓移民が入植し、山間部を中心に住み着いたことも影響している。いわゆる居付の集落である。1874（明治7）年当時の集落数は16で、最も人口の多い久賀集落でも人口は254人と少なく、島全体の12.6%を占めるに過ぎなかった。大村藩の開拓移民は潜伏キリシタンであったが、その多くは明治維新後に復活キリシタンになっていた。この年の調査では、島の仏教徒は1,343人（271戸）、異教徒は666人（140戸）で、異教徒の占める割合は人口比で1/3程度であった。

現在久賀島には、細石流^{さざれ}、深浦^{えいり}、永里^{いのみ}、猪之木^{いのき}、久賀^{いちこぎ}、市小木^{うちかみひら}、内上平、外上平、浜脇、野園^{やその}、田ノ浦^{うちこうとまり}、大開、内幸泊、蕨、福見、五輪のあわせて16の集落がある。2021年4月末時点での住民基本台帳上の集落別人口と世帯数は次の通りである。

細石流：8（4）、深浦：11（5）、永里：12（9）、猪之木：36（18）、久賀：69人（47戸）、市小木：20（12）、内上平：11（5）、外上平：32（21）（浜脇、野園を含む）、田ノ浦：14（10）、大開：26（17）、内幸泊：4（2）、蕨：41（29）（福見、五輪を含む？）、折紙：2（1）

ちなみに久賀島では5月12日と6月2日に新型コロナウイルスの集団接種がすでに実施済みであるが、この時、島民と島で働く人々の200名強が受けたと公民館報に書かれていたので、実際に島に住んでいるのは200人を少し下回るのが実態ではないだろうか。

島内には田ノ浦と蕨を結んで県道が整備されているが、他の道路は全て市道である。



鏡のような深浦湾（左）、フェリーひさかが停泊する島の玄関口・田ノ浦漁港（右）

民宿深浦荘

深浦荘は久賀湾西岸のほぼ中央部あたりに位置する深浦地区にある。ところが久賀湾沿いの道は狭く、おまけにガードレールがないから運転を誤れば海に転落しかねない。後で聞いた話では市道は整備が遅れているとのこと。もちろん対向車が来れば大変なことになる。兎に角、初めての道なので慎重な運転でノロノロ進む。やっと深浦の集落についてほっとするが、人家は空き屋ばかりで人もいない。しかもお目当ての民宿は見当たらない。集落から数100mほど進むと民宿の看板が現れた。しかし、道路の先が見えないほどの急な坂を海に向かって下らなければならない。先が見えないから、道を確認すべく車を降りて下まで行った。再び車に戻り、運転して海岸まで出ると、海に面してその民宿があった。

最初に対応してくれたのは男の子で、しかも何人もいる。こんなところに子供がたくさんいるとはどういうことなのだろう。いぶかしく思っていると、ご主人が脇から現れた。車を誘導してくれて、宿に入る。男の子からアルコール消毒を勧められ、しかも検温チェックを受ける。この民宿にはご主人と小中学生の男の子4人が暮らしている。子供どうしは全く似ていないし、ご主人とも似ていない。子供でも兄弟でもないようだ。

2年前に建て替えられた民宿の内装は木材で統一され温かみがある。風呂も清潔できれいだ。トイレはウォシュレットまでついている。都会から来た人にとっても全く問題のない宿といえる。風呂に入ってから夕食になった。当日のメニューを紹介しておこう。

刺身はシビマグロ、メジナ、カンパチ、アジの4種。地元でノウソと呼ぶサメの仲間のボイル、カンパチの腸のボイル、バイの煮つけ、ヒラマサのカマの塩焼き、生ウニ、マダイの兜煮、イトヨリの塩焼き、五島牛のステーキであった。ツマにはツノマタやトサカノリなどの海藻が添えられている。刺身用に醤油と酢味噌、ポン酢が用意されていた。とても食べきれない量ではないが、折角のご馳走なのでマダイの兜煮の一部を残して平らげた。

なお、朝食はサバ味醂干し焼、温泉卵、辛子明太、サラダ。昼の弁当は牛丼であった。



久賀湾に面して建つ民宿深浦荘（左）、深浦荘の夕食（右）

久賀島の宿泊施設はこの深浦荘しかない。ご主人の赤松繁さんは漁師である。主として潜水漁業に従事し、漁協の潜水部会長を務めている。といっても久賀島で潜水漁業を営むのは赤松さんの他に1人しかいない。主な漁獲対象はウニ類（ムラサキウニが中心）、サザエ、アワビ、トサカノリなどの海藻類などである。ウニ類の漁期は5月10日から7月いっぱい。アワビの漁期は12～1月だ。

赤松さんのルーツは兵庫県の姫路で、その後四国にわたり、さらに福江島の富江を経由し

て、祖父の時代に久賀島に来たらしい。福江島の富江には赤松姓が3～4軒あるそうだが、久賀島には深浦荘の1軒だけしかない。

奥さんは現在入院中とのことで、民宿の料理はご主人がつくっている。予約の電話を入れた時に対応してくれた女性は娘さんで、宿にかかってきた電話は彼女のところに転送される仕組みになっている。彼女は島で看護師として働いており、このところコロナのワクチン接種などで忙しく、民宿を手伝う余裕はないようだ。

しま留学としま親

民宿深浦荘にいた4人の子供たちは、実は五島市立久賀島小中学校に通う「しま留学生」だった。五島市では島の小中学校を維持し島を活性化するため、2016年4月からしま留学制度を発足させている。親も一緒に移住する家族留学としま親（島でこどもを預かる里親）の元から通うしま留学に分かれる。初年度はしま留学生3人を受け入れ、13人の小中学生からスタートした。つまりこの年は島の出身者が10人いたことになる。

深浦荘のしま留学生は、兵庫県出身の小5年生（小池碧君）、岡山県と京都府出身の中1年生（細川優樹君と越山福太郎君）、そして身長180cm以上はあると思われるノッポの京都府出身の中3年生（蛭間壽之亮君）である。小池君と細川君は4月から、越山君が2年目、蛭間君が3年目になる。現在、久賀小中学校の在籍者は14人だが、このうち家族留学3人、しま留学生10人という内訳で、地元出身は1人という危機的状況を迎えている。

しま留学に必要な費用は、しま親への委託料が月3万円、給食費月5,000円前後、PTA会費年4,800円、教材費が年3,000～5,000円である。赤松さんは4人を預かっているので月12万円の委託料収入があり、この費用で食事や生活費をまかなっている。私が泊まった部屋の廊下を挟んだ反対側が子供たちの部屋になっているようだ。食事はみんな揃って食堂で食べる。ここにはテレビが置かれている。

赤松さんによると4人のしま留学生のうち3人が不登校だった。1人は親が息子に田舎暮らしを体験させたいと希望したそう。不登校の生徒はみな同じ境遇だったので、島に来てからは不登校にはならず元気に通学しているという。民宿から小中学校までは4kmほどの道のりだ。私たちの時代以前であれば歩いて通った距離であるが、今はそういうわけにはいかず、毎朝タクシーで通っている。

赤松さんは、「しま留学生に泳ぎを教え、サザエを採らせてやりたい」と抱負を語る。



しま留学の小中学生（左）、トサカノリを干すしま親の赤松さん（右）

赤松さんは趣味人である。民宿の脇の小屋では鷹が飼われていた。種類は聞き忘れた。島の鳥については一家言あるようでやたらと詳しい。島に猛禽類は5～6種類生息するようで、最も多いのがミサゴ、猛禽類の中で一番小さいツミも多いという。留鳥は45種類ほど生息し、離島を住处とするカラスバトもいるという。

赤松さんは潜水漁師であることから、海の環境にも強い関心を払っている。10 数年前の夏に高水温になったことがあり、この時にムラサキイガイが全滅、磯焼けが一挙に広がった。久賀湾の中央付近には周辺よりも5℃ほど水温が低い海域があり、この場所だけわずかにホンダワラ類が残ったそうだ。その後も磯焼けが固定され、アラメやカジメは消え、ワカメも生えなくなった。テーブルサンゴが広がり、沖縄の海のようになっているところもあるという。海藻がなくなって最初にアカウニが消え、アワビも餌が少ないために痩せていて美味くない。

こうした中、ガンガセなどの食害動物を駆除し、母藻を投入するなどして藻場の再生に取り組んでおり、一部で復活しているところもあるそうだ。

令和3年6月25日

深浦

民宿の前には鏡のような久賀湾が広がる。朝の空気は清々しい。赤松さんと話をしているともう80歳に近いおばあさんが船外機で颯爽と現れた。もと海女で、ウニの殻剥きを手伝ってもらっているようだ。ウニは漁獲後1日置いてから剥くと、水分が少なくなるという。

近くに小さな島が浮かんでいた。民宿へ下る坂道の途中は最近崖崩れを起こしたようで、茶色の土がむき出しになっている。民宿から海岸沿いの防波堤に沿って道があり、深浦の集落まで歩いて行ける。

深浦は久賀湾に面する唯一の集落で、海側にはポンツーンが設置され、小割生簀も浮かぶ。赤松さんが利用しているのかもしれない。家は海岸線に沿った山際に10軒ほどが確認できる。そのうちのほとんどは空き家で、中にはすでに崩壊した家もある。深浦の集落には赤松さんを含めて2戸しか住んでいないそうだ。



久賀湾に面した深浦の集落（左）、崩壊した深浦集落の家（右）

福江市史によると、藩政時代、久賀島では深浦だけに窯百姓がおり、塩づくりと炭焼きに従事していたといわれている。またオゴ、テングサなどの海藻を共同で採取し、藩に納めていたそうだ。共同採取した海藻類は頭割りして均等に配分し、採取方法も口止めして乱獲を

防ぐだけではなく、その発生にも注意し、発育前の磯洗いも村中総出で行ったと書かれている。

1874年には17戸73人が住んでいたが、漁業は磯根資源を中心としたものであまり発展せず、また平らな土地も少なかったことから徐々に衰退していったものと推定される。

細石流

朝食を済ませてから島の最南端の細石流^{さざれ}に向かう。民宿の坂を登って右折しなければならないが、道路幅が狭くて曲がれない。一旦、深浦の集落まで行き、広い場所に出てUターンする。坂道を登りかけたところで民宿のご主人赤松さんがバイクでやってきた。昼食の弁当を受け取るのを忘れたため慌てて追いかけてきたのだった。対向車が来るとすれ違おうのが難しいほど狭い道がくねくねと続く。海側にはガードレールがないから、脱輪したら大変なことになる。幸い永里から深浦に抜ける道よりも道路幅が広いので、恐る恐る走る必要はなかった。浜泊と書かれた木柱が立っていた。道路から海側に少し入ったところにかつて集落があったようだが、今は廃村となっている。

山道をなお進み、最南端の近くに来ると眼下に牛舎が見えた。海岸のすぐ脇に牛舎が建ち、海と牛は不釣り合いな感じを受けるが、牛舎には20～30頭の牛が飼われていた。さらに進むと細石流の集落が現れ、行き止まりとなる。海岸近くに家があり、人の気配がした。さらに進むと道路脇に墓地があり、墓石には濱辺、宮崎、川端、濱本、畑田、川崎、真鳥の7つ名字が記されていた。なお枝の陰に隠れて見えなかったが別の姓が2つ連記された墓石もあった。

住民基本台帳上では細石流には4世帯8人が住んでいることになっているが、実際に住んでいるのは2世帯6人だけだ。畑田吉男（68歳）さんと息子の畑田幸彦（35歳）の2所帯である。吉男さんは一本釣りの漁師で、細石流漁港（第1種）に係留されていた唯一の漁船が吉男さんの船である。夏はイサキ、秋から正月にかけてマダイやブリを釣る。また潜水漁業も兼業していて、12～1月にかけてアワビとサザエ、春はウニを採っている。一方、息子の幸彦さんは海岸近くにあった牛舎で肉牛の繁殖を行っている。最近、猪之木地区に新たに牛舎をつくり、細石流と2ヶ所の牛舎で、全部で50頭余の肉牛を飼う島内最大の繁殖農家である。ちなみに農協で聞いた話では、久賀島の繁殖農家は11戸である。子牛のセリは隔月年6回あり、久賀島からは年間90頭ほどが出荷されているという。現在の久賀島の最大の産業が、肉牛を繁殖する畜産業であり、これに漁業が続く。



海岸付近に建つ牛舎（左）、細石流漁港に1隻だけ係留されていた漁船（右）

細石流は仏教徒とキリスト教徒が混住した集落であった。1875年当時の人口は132人、33戸。海辺近くに仏教徒が住み、居付と呼ばれた外海地方から移住してきた潜伏キリシタンは集落の外れや山側に住んだ。もともと住んでいた仏教徒は地下と呼ばれた。潜伏キリシタンは解禁後、復活キリシタンになる。そして1921(大正10)年に細石流教会を作ったが、1969年には廃棄され、現在建物は残っていない。

昭和初期には約100人が住んでいたといわれているが、1971年にキリスト教徒を中心に約30戸が福岡県行橋市に集団移転し、残った20戸も次々と集落を去り、現在の2所帯だけになったのであった。

久賀

細石流から久賀湾の西海岸に沿って市道を走る。深浦をすぎ、内陸部の永里、猪之木、市小木の集落を経て、島の中心である久賀の集落に入った。内陸部は比較的平坦な土地が多く、島にしては田んぼが目につく。すでに田植えは終わっていた。この一帯は農村の趣である。

久賀の集落には五島市立久賀小中学校、郵便局、診療所、警察署、五島市久賀島出張所、農協などの公共施設が集中している。久賀地区が行政の中心になったのは宝暦年間(1751～1763年)に代官所が田ノ浦から移されてからであった。

島で唯一の信号が小中学校の前にある。小中学校の在校生は現在15人で、このうち14人が島外から来たしま留学生であることはすでに述べた。つまり在来島民の子供は1人だけであり、留学生によってこの小中学校は維持されていることになる。「しま親」は上述した民宿深浦荘以外にも3戸いるそうだ。小中学校では「しまの里」という学校だよりを発行している。

昨日、海上タクシーをチャーターして蕨小島に行ったのだが、福江島でお金をおろしてくるのを忘れ、持ち合わせが少なかったため現金でチャーター料を支払うことが出来なかった。振込にすることは了解して頂いたがなるべく早く振り込みたい。郵便局で振り込もうとしたが、お金は降ろせるものの、郵便局から市中銀行への振り込みはできないといわれ、JAで取り扱ってくれると紹介された。チャーター料の3万円をおろし、JAに行って送金手続きをする。振込の手続きをするのに15分ほどを要した。



市立久賀小中学校(左)、久賀郵便局(右)

引き続き近くの役場の支所に行き、住民基本台帳上の人口と世帯数を聞く。対応してくれた職員の方は4月に移動してきたばかりといい、島のことを聞いてもほとんど答えられな

い。赴任する以上はもう少し勉強してこいといいたところだが、衰退する島を何とかしたいというパッションは感じられない。

久賀湾の湾奥は干拓地になっている。道路脇に「干拓記念之碑」と書かれた石碑が立っていた。この干拓事業は戦後の食糧難に直面した1950年に計画され、1958年に着工し、1963年に完成した。その後、塩害などがみられたため、盛り土などの対策がとられ、市小木干拓土地改良事業を経て、1983年から耕作が行われてきた。総面積は約16.7ha、うち耕地面積は12.8haである。ところが米の消費減退による需要減と島の人口の急な減少から米作を放棄している田も多く見られた。

干拓地の奥が大開の集落で、田園風景が広がる。

折紙神社と観光交流センター

農協の少し先に折紙神社がある。振込手続きをしている間に訪ねた。この神社は島の総社で、1596（慶長元）年に伊勢の国より天照大神の神霊である神札を勧請したと伝わる。明治24年に現在地に移転した。神殿は尾張（現在の愛知県）の熱田神宮を模したもので、用材は尾張から取り寄せ、尾張の宮大工が造ったものらしい。

少し離れたところに久賀島観光交流拠点センターが整備されている。庄屋の邸宅だった旧藤原邸を活用したものだ。2018年7月に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録されたのを契機に観光客の増加を見込んで整備したのだろう。久賀島の文化的景観に関する情報発信拠点施設として位置づけられている。築約120年の古い家で、久賀島では最も豪華な建築物と見受けられた。展示室は3つに分かれ、休憩スペース、トイレなどが整備されている。

入場無料で、開館時間は9時から17時まで。月曜日が休館日になっている。3日前に予約すれば、久賀島の食材を使用した「久賀島定食」（1,500円）を食べることができる。施設の管理人は、10年前に地域おこし協力隊員として久賀島に赴任した人で、現在は久賀島に定住しているようだ。

この邸宅の周囲は高い石の塀で囲まれ、その上に人頭大の丸い石が並べられている。この石は「こぼれ石」と呼ばれている。同じような光景は福江の武家屋敷にもみられ、この地方の特徴のようだ。センターの管理人にこの石の目的を尋ねると、敵が襲ってきた時に塀を登りづらくしたこと、また石を投げて進入を防いだのではないかという。



熱田神宮を模した折紙神社（左）、観光交流センターと石塀の上のこぼれ石（右）

牢屋の窄

久賀湾の湾奥から海岸沿いの県道を北に進むと、牢屋の窄^{まこ}殉教地がある。県道から少し階段を登ったところに聖堂があり、敷地内に牢屋の跡と書かれた石碑や「信仰の碑」が立つ。

幕末にやってきたヨーロッパの宣教師は日本におけるキリスト教の復活をめざし、布教活動始める。久賀島の潜伏キリシタンは長崎の大浦天主堂の宣教師に接触し、復活キリシタンとなった（宣教師不在時代に独自に発展したカクレキリシタンとは別）。当時キリスト教禁止の高札はまだ生きていたので、1868年には五島列島一円の復活キリシタンに対する取り締まりが行われた。いわゆる「五島くずれ」である。禁教の高札が明治政府によって撤廃されるのは1873年なので、キリスト教が解禁される5年前のことであった。

この時、久賀島では島内の約200人の復活キリシタンが捕らえられた。上述したように1874年の時点で島には666人の異教徒がいたから、異教徒の1/3ほどに相当する。内上平の集落にあった信徒の家がこの地に移されて牢屋となり、ここに捕らえられた約200人が収容されることになった。牢屋は3間×2間、つまり面積は6坪で、真ん中を仕切って男女別々に監禁された。監禁は8ヶ月間にわたり、この間に拷問された39人が死亡、また出牢後に3人が死亡している。

この殉教の地を永久に保存しようと地域の信者が浄財を出し合い、地主より土地を買収し、「信仰の碑」が立てられた。また1984年には新聖堂が建てられている。敷地内には久賀島カトリック教徒囚獄の跡という石碑が立つが、そこには次のように書かれていた。

「狭隘な牢内では身動きすることも困難で人の体にせり上げられて足さえ地に着かないものもあって、さながら人間の密集地獄であった。三日目には足が腫れ上がり、食べ物は芋の小切れを朝夕1個ずつ、飢えと苦痛のため死者が続出した。死体は次第に密集地獄の下に踏みつぶされて腐敗するが5日間も放置され、蛆がわいて人体に這い上がりその上で、その場に放尿排便せねばならぬので、その不潔さと臭気は言語を絶する惨状で13歳のドミニカたせは、蛆に下腹を食い破られて死亡した。」

如何にも大げさである。6坪の建物に200人を詰め込むことが果たして可能だろうか。タタミ1畳当たりにすると16.7人になり、どう見ても物理的に不可能であろう。そして朝夕1個の芋の小切れだけで8ヶ月も生きられるだろうか。当局のキリスト教弾圧が如何にも残忍で過酷であったことを示すための後の人の作り話のように思える。日本にはキリスト教徒を英雄視するこの手の話が多すぎる。



牢屋のあった跡地の碑（左）、1984年に新しく建てられた聖堂（右）

クルマエビ養殖

久賀湾の東岸の中ほどにクルマエビの養殖場がある。小さな島の周りを囲むように堤防が築かれ5面ほどに仕切られている。手前の陸側は棚田が連なっており、田には植えられて間もない早苗が緑の輝きを放っていた。

この養殖場はもともと久賀島漁協が整備し、経営していたものである。しかし漁協のクルマエビ事業は、民宿深浦荘のご主人によると、売り先も経費も考えない放漫経営であったから、結局5億円ほどの負債を抱えて倒産し、事業を放棄したという。その後、現在の榑拓水が施設を安く買い取って、1996年から事業を再開している。榑拓水は経営不振に陥ったクルマエビ養殖場を買い取って再建するという事業モデルで養殖場を広げており、現在、久賀島の他に、山口県の周防大島、種子島、佐賀県の唐津と伊万里の合計5県6事業所で事業を展開している。また関連会社として沖縄県の与那国島にも養殖池を持っている。

クルマエビは4月に採卵し、中間育成をへて6月ごろに池入れする。12月末から出荷が始まり2月上旬に出荷のピークを迎える。出荷後、養殖場の水を抜き、1ヶ月ほど日光にさらして耕耘機で砂床を耕し、翌シーズンにつなげるという生産パターンが繰り返されている。つまり生産のサイクルは1年ということになる。ちょうど稚エビの池入れ作業が終わり、酸素供給のための水車が盛んに回っていた。



折紙展望台から撮影したクルマエビ養殖池の全景（左）、早苗と養殖池（右）

蕨

クルマエビの養殖場から峠を越えて大きく曲がりくねった坂を下った先が、蕨地区である。蕨地区は久賀島の北東に位置し、集落の規模は久賀に次いで大きい。奈留瀬戸に面しており、集落の目の前に昨日訪ねた蕨小島が横たわる。今年5月末時点の住民基本台帳上の人口は41人、世帯数は29戸であった。

集落を囲むように棚田があり、米を自給できるほどの面積を有す。集落の最も高い位置に墓地があり、墓石が30基以上並んでいた。坂を下った先に旧小中学校、その山側に蕨神社がある。墓地も神社もあるということは、この蕨地区は仏教徒の集落で、カクレキリシタンも復活キリシタンもいなかったのだろう。

久賀島には小学校が3校あったが（現在は久賀小中学校1校に統合されている）、そのうちの1校が蕨地区に置かれていた蕨小中学校であった。ちなみにもう1校は田ノ浦小学校である。蕨小学校は1875（明治8）年に久賀島学区蕨分校として創立され、2009年3月末

で134年に及ぶ歴史を閉じた。「閉校記念、ありがとう、友よ、蕨よ、学び舎よ」と書かれた石碑が旧校門の近くに置かれていた。12年経った現在も校舎はそのまま残り、校庭の草はきれいに刈られ、管理が行き届いていた。

「福江市史」によると、蕨地区には海に沈んだ高麗島から逃れてきた人々が住み着いたといわれ、その後各地からの移住者が増え、半農半漁を生業としていたという。この高麗島は一夜にして沈んでしまったとされる伝説の島で、久賀島の北西約45kmの海底から人が住んでいたと思われる石垣などの痕跡が発見されている。そして島から携えてきたという高麗地蔵が蕨集落の太子堂脇に祀られている。逃れてきたという旧家には高麗焼の陶器も秘蔵されており、柳田国男は「昔繁栄していて後に海底に沈んでしまった島で、島の人々は優れた陶器を作って暮らしを立てていた」と紹介しているという。島があったとされる海域は高麗曾根と呼ばれ、好漁場として知られている。恐らく地震で沈んだのではないだろうか。

蕨という集落名の由来は2通りあって、その1つは昔藩主一行がこの地に上陸した時、暗夜のためワラを燃して案内したことから「わら火」となったという説、もう1つがこの地が蕨の産地で蕨粉を作って藩主に献上したという説である。よくある話なので真偽のほどはわからない。



背後の高台からみた蕨の集落（左）、旧蕨小中学校の校舎（右）

定置網

集落の前に蕨漁港（第1種）が整備されている。北側に一文字防波堤が長く伸び、集落の東側前面の海は埋め立てられて、かなり広い漁港用地が造成されていた。港の中央付近に大きな浮棧橋が置かれている。

漁港に行くと、用地内で4人の若者が定置網の網を繕っていた。4人うちのリーダー格が話をしてくれた。経営者の息子で片山征治郎さんという。長崎県立長崎鶴洋高校の水産学科を卒業し、下関水産大学校に進学、長崎魚市で4年間働いた後、2019年4月に久賀島にUターンした。島に戻って2年、父親と共に定置網を営む3代目だ。

残りの3人は従業員で、1人は久賀に住み、2人は福江島の福江と岐宿から来ている。通常、定置網はこの4人と「社長」と呼ばれている経営者の5人で操業している。彼らはお揃いの「久賀丸」と書かれたTシャツを身に着けており、写真を撮らせてくれと頼むと全員が背を向けてくれた。

蕨地区に拠点を置く久賀丸は、大型定置網と小型定置網をそれぞれ1ヶ統ずつ敷設して

いる。大型定置網の漁場は島北部の細石流地区の沖にあり、船で15～20分を要する。小型定置網の漁場は久賀湾の入口付、折紙集落の沖である。定置網の船団は、本船、網を積むダンベ船、運搬船、船外機の合計4隻で構成されるが、中央の浮棧橋に本船とダンベ船が係留されていた。それにしても5人で大型定置と小型定置の両方を揚げるわけだから随分と合理化されていると思う。定置網の漁獲物は、イサキ、ブリ、ヒラス、アジなどである。

水揚げは早朝である。午前6時に出港し、午前9時には漁港に戻る。漁獲物は長崎県漁連経由で主として関西市場に出荷しているの、10時30分までに箱立しないと間に合わない。福江島まで自社の運搬船で運び、福江島から県漁連のトラックに積んで本土に運ぶ。2次離島のため流通面で大きなハンディキャップを抱えている。

この日は、朝の網揚げを終え、定置網を修理しているところだった。昼になると、全員が昼食のためどこかに消えていった。

だだっ広い漁港内には定置網の船以外に漁船は数隻しかなかったの、蔵地区の漁業はこの定置網が中心となっているようだ。



網を繕う久賀丸の乗組員（左）、定置網の漁船（右）

五島ふくえ漁協久賀支所

定置網の若い衆に話を聞いてから、漁港の岸壁の前にある漁協の事務所を訪ねた。かつては大きな勢力を有していたようで、事務所は2階建てで、かなり大きい。もともと1島で久賀島漁協が組織されていたが、旧福江市内の漁協が広域合併によって五島ふくえ漁協となり、現在は久賀支所となっている。支所長は週に1回来るだけで、日常業務は女性職員1人に任されている。

ちょうど昼休みに入ったところで、女性職員は昼食の弁当を食べているところだった。彼女に組合員数を尋ねたが2015年当時のものしかわからないという。当時の組合員数は正39人、准71人、合計110人だった。その後、福江島の本所に寄って現在の組合員数を確認したところ、正29人、准76人、合計105人とのことであった。つまりこの5年ほどで正組合員の10人減少している。なお正組合員29人うちの5人、准組合員76人うちの3人は蔵集落の対岸にある蔵小島に住んでいるので、久賀島だけだと、正24人、准73人ということになる。2015年時点の久賀島の世帯数は184戸だったので、海岸近くに住む人の多くは准組合員になっているのではないかと推定される。

漁協ではガソリンと重油を取り扱っており、購買事業がメインである。販売事業は行われ

ておらず、組合員が直接、福江島の魚市場に出荷している。

2018年漁業センサス時の漁業経営体数は20で、個人が19、会社が1の内訳であった、会社は上述したクルマエビ養殖を営む㈱拓水になる。一方、久賀島には蕨小島の3経営体が含まれるから、久賀島の実質的な漁業経営体は16ということになる。久賀島で営まれている漁業は、上述した大型定置網、小型定置網の他に、刺網、延縄、沿岸イカ釣り、曳縄釣り、一本釣り、採貝藻、タコツボが営まれている。漁業就業者は男29人、女6人の35人であった。おそらく組合員数からみると、現時点ではこれよりも減っているであろう。

正組合員がいる集落は、蕨、野園、五輪、田ノ浦、細石流、猪之木（深浦を含む）、久賀の7つである。このうち最も組合員数が多いのは蕨集落のようだ。

隣の奈留島や若松島、中通島などはまき網漁業が発達し漁業が島の経済を支えたのだが、この久賀島はどういうわけか、発達しなかった。まき網漁業は紀州や瀬戸内海の漁業者が移住してもたらされたものであるが、この久賀島には漁業の移住者がいなかったのだろう。あるいは久賀島は農地が相対的に多く農業で十分食べていけたので、このことが漁業への進出を阻んだのかもしれない。



漁協久賀支所の建物（左）、久賀漁港の全景（右）

折紙展望台

蕨集落の北部の高台に折紙展望台がある。展望台の近くまで道路が整備されているのでレンタカーで登り、道端に車を停めて展望台周辺を歩いた。この展望台を過ぎて久賀湾側に入った先に折紙の集落がある。しかし現在では1世帯だけになっているようだ。

展望台からは奈留海峡とその先の奈留島、久賀湾の一部を一望にできる。この展望台は、来島者の観光スポットと島民がくつろげる場を兼ね備えた場所を作りたいとの思いから2002年から久賀島の公民館が各町内会やボランティアグループに呼びかけて、島民の手でつくられたようだ。2004年には東屋も作られている。また毎年島民のボランティアにより、徐草などの整備美化活動が続けられている。こうした活動が評価されて、2006年度には国土交通省の手づくり郷土賞（地域活動部門）を受賞している。

12時33分に折紙展望台を下り、再び蕨の集落に出て、五輪の集落に向かう。蕨集落の背後の棚田を過ぎると山道になる。蕨と五輪との中間あたりに福見の集落があった。集落といっても家は数軒しかない。人が住んでいるのはまちがいなく、谷あいにある田んぼには既に苗が植えられていた。



展望台につくられた東屋（左）、奈留海峡とその先に奈留島を望む（右）

五輪集落

曲がりくねった細い山道を進むとやがて車輛進入禁止の看板が現れた。駐車場に車を停めて歩くことにする。少し車道が続いてすぐに山道になった。ここから五輪までは500mと掲示されていた。

ノートを抱えて歩き出すと、先方から中年の男性が現れた。彼はバイクで来て、五輪まで行き戻ってきたところだった。ノートにメモをとりながら歩く観光客はまずいないから、先方は私のことを研究者か何かと勘違いしたらしく、五輪の集落を案内するからと言って付いてきた。彼はクリスチャンで、兄は宣教師をしているという。帰りの時間が決まっており、あまり余裕がなかったので案内してもらうのは大歓迎なのだが、相手のペースでつきあっていると船に乗り遅れることになる。はた迷惑なのだが仕方がない。彼は500mとの表示は間違いで実際の距離はもっと長いと盛んに言っていた。山道を下り、海岸沿いの道路にでる。この付近に集落があったようで、人家の石垣の跡が見られた。

海岸沿いの道路の先に旧五輪教会堂と新教会堂が2つ並んで建っている。旧五輪教会堂は1881（明治14）年に浜脇の地に建てられた浜脇教会堂を1931年に現地に移築したもので、木造の教会としては最古の部類に入り、国の重要文化財に指定されている。隣の新教会堂は1985年に建てられたものだ。そばに管理人の家があり、彼は管理人に旧五輪教会堂の中を案内させると言ってさかんに呼びかけている。中を見ている時間はなかった。確実に船に乗り遅れるので、断って帰路についた。



五輪の集落（左）、旧五輪教会堂（右）

この教会堂の前は五輪漁港（第1種）になっており、漁船が2隻ほど係留され、その先に家が1軒あった。漁協の話では、五輪の集落には小型定置網を営む漁師が1人いるらしい。

歌手の五輪真弓の父親はこの集落の出身である。漁師をしながら教会でオルガンやバイオリンを弾いていたらしい。祖父も教会でオルガンを弾いており、音楽家の血筋を引いている。彼女は先祖の地をこれまでに4回ほど訪れ、「時の流れに」という曲を作曲している。ちなみにこの集落の住民は五輪姓がほとんどで、本家筋をゴリンと呼び、分家筋はイツワと呼ばれていたという。

浜脇教会

五輪から蕨に戻り、蕨から県道を一路浜脇まで走り、田ノ浦瀬戸に出る。田ノ浦瀬戸に面して、南から野園、外上平、浜脇、田ノ浦の4つの集落がある。

野園は外上平から下った先にあり、野園漁港（第1種）が整備されている。この集落には浜村さんという漁師がおり、イサキ釣りを得意としているとのことで、タコツボも兼業しているようだ。

浜脇には数軒の家があるだけで、ここはキリシタンの集落である。昨日チャーターした長久丸はここを拠点としている。浜脇には瀬戸を見下ろして教会が建つ。海から見るとひととき目立つ。1881年に久賀島に最初の教会堂が建てられたが、1931年に隣の敷地に現在の教会堂が建てられると、古い木造の教会堂は五輪集落に移築され、現存することはすでに述べた。その後、当時としては珍しい鉄筋コンクリート製の教会堂が建設されたのである。

この外上平地区は純カトリックの集落であった。潜伏キリシタンが多かった土地で、明治維新後、復活キリシタンになったのである。教会の近くには十字架を掲げた先祖の墓が立つ。



田ノ浦瀬戸を見下ろす高台に建つ浜脇教会（左）、近くにあるキリスト教徒の墓地（右）

田ノ浦

福江島からの高速船とフェリーは田ノ浦漁港（第1種）を発着しており、田ノ浦は久賀島の玄関口にあたる。湾口に位置する小さな島が砂嘴でつながり、その内側がかなり深い入江になっている。湾口は南東を向き、北西側は山が冬季の季節風を遮っているから、この田ノ浦湾は昔から天然の良港であった。このため、古くは遣唐使船が何回も寄港したといわれている。また倭寇の船や明との貿易船も寄港したとされ、古くから開けた土地であった。

一方、この湾はキビナゴが大挙して来遊する地でもあり、大正から昭和初期にかけてキビ

ナゴ漁が盛んだった。漁獲されたキビナゴは煮干しに加工され、中国に輸出されたという。戦前は15軒の網元がいたが、戦後の漁業制度改革で漁業権は漁協に移管された。そして1965年ごろまでキビナゴ漁は続いたが、次第に衰退していった。

1669（寛文9）年に山口家が着任し、代官所が置かれると、田ノ浦地区は島の中心として栄えた。住民の中には宇久島、奈留島、福江島の岐宿や丸木などからの移住者が多かったという。明治7年当時の人口は227人で、久賀集落に次いで多く、世帯数は46戸であった。この年に田ノ浦小学校の前身が設立されている。つまり代官所が久賀に移されるまでは久賀島の中心地であり、島の反対側の蕨集落とともに小学校が置かれていた。しかし田ノ浦小学校は1987年に廃校となる。その後、松井守男画伯が校舎を借りてアトリエとして活用している。松井は世界を旅しながら作品を描いているようだが、この時期は不在であった。そのためか小学校の跡地の校庭は草が伸び放題になっており、あまり管理が行き届いていない。時間がなかったので立ち寄ることはできなかった。

田ノ浦の集落は、フェリーや高速船が発着する場所とは反対側、つまり湾の東側の海岸沿いに形成されている。かつてキビナゴ漁で栄えたこの集落に漁船はほとんどなく、すっかり寂れている。家は10軒ほどみられるが、独居老人の世帯が多いようだ。湾の一番奥まったところに牛舎があり、30頭ほどの肉牛が飼養されていた。アルファベットで木村と書かれていた。細石流と同様、今や島の唯一の収入源は肉牛の繁殖しか残されていないようだ。

墓地は集落の反対側の山の斜面にあった。草が繁って管理があまり行き届いていない。この田ノ浦の集落は仏教徒が占め、キリスト教徒はいなかった。



田ノ浦湾の湾奥にある牛舎（左）、同牛舎の牛（右）

14時35分発のフェリーで奥浦港に戻る。搭載された車は私のレンタカーだけだった。乗客は2人だけ、とても採算に合いそうもない。

奥浦から福江市内に出て、五島ふくえ漁協の本所を訪問、久賀島の組合員数を聞く。つづいて五島市立図書館で郷土資料を閲覧し、必要箇所をコピーする。トヨタレンタカーに車を返却し、空港まで送ってもらい、18時15分発のANA4916便で福江島を後にした。

【文献】

竹田旦（1968）：5. 五島久賀島、離島の民俗。民俗民芸双書、岩崎美術社、東京。222-233。

福江市（1995）：第7章旧久賀島村、福江市史上巻。1139-1107。